# 柏亭本『うつほ物語』（広島大学蔵）の特色（その二）

## ――藤原の君巻・忠こそ巻――

猪川優子

### はじめに――藤原の君巻・忠こそ巻の書誌

本稿は、広島大学附属中央図書館が蔵する柏亭本『うつほ物語』（写本全二十冊）についての第二次調査報告である。前稿[1]では、第一冊俊蔭巻の書誌および前田家本との異同を中心とした本文の内実を紹介した。本稿では引き続き、第二冊藤原の君巻・第三冊忠こそ巻についての調査結果を報告する。

まず、第二冊と第三冊の書誌を記す。保存状況および本の体裁は、第一冊と同じ形態を有する。表紙左肩には、第二冊では「うつほ物語 第二 藤原の君」と、第三冊では「宇津保物語 第三 たゝこそ」と墨書された題簽が貼られている。前見返しと後見返しに使用されている料紙は、第一冊の後見返し同様、本文共紙の反古紙であり、墨付部分が見えないように袋綴にして表紙の裏に貼り付けられている。[2]丁数は、第二冊が五十三丁（その内墨付五十一丁。ただし第五一丁裏は白紙、遊紙前後各一丁）、第三冊が三十丁（その内墨付二十八丁。遊紙前後各一丁）である。また第一冊と同様、本文冒頭頁左肩の余白にそれぞれ「第二藤原の君」「第三たゝこそ」と、巻数および巻名が墨書されている。

和歌の表記法についても前稿同様ふれておく。〈一行型〉〈二行断続型〉〈二行連続型〉の三つの型に和歌を分類した場合、[3]第二冊の和歌七十八首は、前田家本ではすべて〈一行型〉となっており、柏亭本でも一首を除いて〈一行型〉である。また第三冊の和歌二十首は、前田家本ではすべて〈一行型〉であるのに対し、柏亭本では〈一行型〉が十六首、〈二行連続型〉が四首となっている。

ここで注意を要するのは、第二冊で除いた一首（第四八番歌）の表記である。以下にその該当箇所を併記する。

［柏亭本］

一聲と社云なれあやしうもの給かな侍従の君しののめ

［前田家本］[4]

一聲にあくなる物を時鳥こゝら

ひとこゑにあくなるものを郭公こゝら〈空白六字〉しのゝめ

傍線部が示すように、両本とも下句に脱落がみられる。しかし、柏亭本において「しののめ」四字が本来あるべき和歌の行ではなく、右に一行ずれて書写されており、結果、本文に混入する形となっている。これは両本の関係を探る上で極めて興味深い事実である。この脱落箇所については諸本によって異同がみられるが、[5]両本は「こゝ

ら」の後六文字が脱落し、「しののめ」四文字が存することに関しては一致しており、このことは両本が近い関係にあることを示唆している。しかし、柏亭本の「しののめ」四文字の位置を鑑みると、柏亭本が前田家本に劣るといえよう。つまり前田家本および柏亭本に至るまでに、すでに六文字脱落しており、前田家本では「しののめ」四文字が和歌の一部であるという認識が残っていたために空白を間に置いて書写され、一方柏亭本の場合は同四文字が和歌の一部であるという認識を離れ、前の行の末尾にあったちょうど良い空間に、うまい具合におさまる形で書写されて伝わったのであろう。

第三冊の〈二行連続型〉四首についても、もともと本文と区別するために和歌を二字下げで一行書にするという基本方針が、前田家本の書写段階では守られていたが、柏亭本の書写段階ではすでにその厳密さを欠いて伝わったと推測される。

ここで、両本が同じ祖本を持ちながら両本に至る段階ですでに枝分かれしていたのか、それとも前田家本からの流れを直接柏亭本が汲んでいるのかという問題が残るが、現段階では中村忠行氏[6]がかつて推定されたように、おそらく前者であろうと考える。柏亭本は、その奥書より里村昌純自筆本と知られる。里村家は周知のごとく幕府に仕えた連歌師の家であり[7]、その南家に連なる昌純は、慶安二年（一六四九）に生まれ、享保七年（一七二二）に没している。前田家本は、慶安四年（一六五一）に前田利常に後水尾天皇から下賜されたものであり、もし直接の前後関係があるのなら、年代的にももう少し近い本文を有していてもよさそうである。やはり里村昌純自筆本は、里村家に伝わる本文の系統であるとみて、前田家本とは比較的近い位置にありながらも、全くの同系統ではないとみるべきであろう。この問題に関しては、本稿ではここまでとし、今後里村家における『うつほ物語』受容の実態とともに調査を続け、あらためて別稿を用意したい。

以上、第二冊藤原の君巻・第三冊忠こそ巻の書誌についての報告を終わる。続いて本文の特色について、その内実をみていく。前稿同様、前田家本との異同を中心に本文を辿っていくのであるが、今回は第一冊俊蔭巻との比較も視野に入れながら特色を探っていく。

## 一　柏亭本と前田家本との異同

まず大きな特色として、かつて吉山裕樹氏[8]が指摘しておられた通り、柏亭本の藤原の君巻・忠こそ巻が、俊蔭巻に比べて前田家本本文とかなり近いという事が確認できる。柏亭本が前田家本よりも漢字を多用しているという事については、俊蔭巻を引き継いでいるものの、柏亭本が明らかに前田家本と系統の異なる独自本文を有しているという事実は見あたらないのである。そこで、今回の調査報告では、前稿においては問題としなかった程度の異同も扱う結果となった。各巻の相違については、すべての巻の調査を終えた後、あらためて全巻を俯瞰する形で総括を試みたいと考えており、現段階では、それぞれの巻に即して調査報告を記すこととする。なお、本文

の引用に関しては、上段に柏亭本、下段に前田家本を配し、括弧内に『本文編』の頁数と行数を記した。また私に、異同部分に傍線を付し、必要に応じて句読点および鈎括弧を付した。

（1）前田家本にない語句が柏亭本にある例

まず藤原の君巻の例を幾つか任意に挙げる。本巻では、俊蔭巻で紹介したような一単語から一文節程度といった例はみられず、すべて一文字の相違である。

①いたやなく、有限りのひはた也。――いたやなく、あるかきりひはたなり。（六八頁8行）

②まつ、宮、おほい君は太郎・次郎・三郎・四郎、――まつ、宮、おほい君・太郎・次郎・三郎・四郎、（六八頁11行）

③「いかて、か計そかし。御心は」――「いて、かはかりそかし、御心は」（七二頁3行）

④ゆけともゆかれす」――ゆけとゆかれす」（七六頁11行）

⑤つゆをもみせ給へ」――つゆをも見給へ」（七八頁6行）

⑥皆とらせ給へり。――みなとらせ給へ。（八三頁5行）

①②は、柏亭本に余計な語句が混入している例である。③④は、文脈上特に意味の変わらない例であり、どちらが上位とも言い難い。一方⑤⑥は、柏亭本がよりよいことを示している。⑤は、『本文編』において「つゆをも見せ給へ」と校訂されており、柏亭本と一致する。また⑥は、『本文編』では、「みなとらせ給つ」と校訂されている。これは、文脈の整合性のために「へ」を「つ」の誤写と判断したものであるが、柏亭本の場合、校訂を施さなくてもそのままの状態で文脈が整っている。

続いて、忠こそ巻の例を示す。本巻では異同はさらに少なくなる。

①おなし野へにや――おなしのにや（一一九頁8行）

②『あからさまにまかてゝ、只今物せよ』――『あからさまにまかて、たゝいま物せよ』（一三六頁15行）

③きんのみそなん――きんのみなん（一四一頁1行）

①②は、文脈上特に意味は変わらない。しかし③の場合、柏亭本では「そ」「なん」と係り結びが重複しており、前田家本の方が適当な本文であるといえる。

（2）前田家本にある語句が柏亭本にない例

藤原の君巻・忠こそ巻ともに（1）よりも該当個所が多いが、やはり俊蔭巻ほど際立った異同はみられない。まず、藤原の君巻について、任意に数例示す。

①あきすみ、廿六――あきすみ、年廿六（六九頁6行）

②今なん、きよらに成ぬる」――いまなん、いときよらになりぬる」（七七頁9行）

③「われ、この世に生れて、――「われ、このよにむまれてのち、（八一頁17行）

④北のおとゝは、宮・父おとゝ内へ参給ふとていそく。――きたのおとゝは、宮・ちゝおとゝすみ給。おとゝ、うちへまいり給とていそく。（八〇頁10行）

①の場合、前後の文脈より柏亭本の誤りであると判断される。しかし②③の場合、柏亭本が語句を脱落している可能性が高いものの、ただちには決め難く、他の諸本と照合させることによって本文を整理する必要があると思われる。ただ④の場合は、柏亭本に至る書写過程で、「おとゝ」に続く語句を誤ったと認め得る。

続いて、忠こそ巻の例を挙げる。

①祈ら給に――いのらせ給に（一一七頁15行）

②をのか身に苦きことなんあるとかしこにかたらむ――をのか身にくるしきことなる。『かゝることなんあると、かしこにかたらん』（一二九頁7行）

③宮仕しつゝいぬ。――宮つかへしつゝいてゝいぬ。（一四〇頁15行）

④えたしかに・定めぬ。――えたしかにもえさためぬ。（一二七頁11行）

①②は柏亭本の誤りであり、③も柏亭本の誤りである可能性が高い。ただ④の場合、前田家本の「え」の重複が妥当なものかどうか、疑問が残る。[9] 更なる検討を要する箇所である。

（3）**柏亭本と前田家本とで文の続き具合が異なる例**

該当箇所は、藤原の君巻では数例みられるが、忠こそ巻ではみられず、以下に挙げる二例は、どちらも藤原の君巻のものである。

①猶、をいらかに参り給へは、兵衛、――なを、おいらかにまいり給へ。兵衛、（七四頁12行）

②おほくのせにいてゝ、そのかす、――おほくのせにいてく。そのかす、（九〇頁17行）

①の場合、柏亭本と前田家本とで鈎括弧の位置が異なるが、文脈上、前田家本の方がすんなりと意味が通る。②の場合は、踊り字と「く」の形状が似ているために起こった相違であるが、両者ともに文意に支障をきたさないので、どちらが上位であるとの判断は出来ないといえる。

（4）**柏亭本と前田家本とで語句が異なる場合**

前項までと比較すると、藤原の君巻・忠こそ巻ともに該当個所が増えるが、やはり俊蔭巻ほどの違いはみられない。特に音韻に関しては、俊蔭巻でみられたような顕著な相違というものは見当たらず、前田家本で「下らう」（「下鵜」八五頁7行）とあるものが、柏亭本では「下ろう」となっていることくらいである。これは、もともと「下らふ」であったものが変化したと考えられ、柏亭本の方が変化の度合いが進んでいるといえるが、それほど大きな差ではないと思われる。

文脈上特に意味が変わらないものについても、両巻ともに該当個所が少なく、以下まとめて任意に数例挙げる。

①程もなくおとなに成はて給、――ほともなくおとなになりいてたまふ、（藤原の君・七一頁2行）

②三の君――三のみこ（藤原の君・一〇六頁10行）

③此北の方に、――かのきたのかたに、（忠こそ・一三一頁14行）

④つらきよのみそ――つらきせのみそ（忠こそ・一三八頁14行）

①②③については特に問題はないが、④の場合は注意が必要である。④は「おもひいでゝふみ見るごとにみなせがはつらきせのみぞあまたみえける」（『本文編』）という和歌の一部であり、傍線部には水無瀬川の「瀬」に世の中の「世」が掛かっている。そこで、漢字表記にするならば「瀬」、音を示すには前田家本の「せ」が適当であるといえる。

続いて、文脈上意味が異なるものをとりあげる。まず藤原の君巻の例を任意に挙げる。

①十三の君、そて宮は、十四の君、けす宮、七。――十三の君、そて宮、八、十四の君、けす宮、七。（七〇頁2行）

②あて宮、「かゝる人の返事はせぬものそ。――あて宮、「かくり人のかへりことはせぬものそ。（九八頁6行）

③岑といふらん――みねとなるらん（一〇四頁10行）

④今ほひ出給ふかれう也。――いまおいいて給かれうなり。（八〇頁15行）

⑤殿、打わらひのゝしりて、御返なし。――殿、うちにわらひのゝしりて、御返なし。（八一頁13行）

①は柏亭本が誤りであると思われる例、②は前田家本が誤りであると思われる例である。③は、諸本いずれも「いふ」という本文はとっておらず、柏亭本の誤りである可能性が高いが断定は出来ない。④⑤は、文脈上優劣の判断がつきかねる例であり、今後更に検討を重ねる必要がある。

次に忠こそ巻の例を挙げる。

①内にさふらはんとおほして、――うちにさふらふらんとおほして、（一三五頁16行）

②こ君の御為に八かうし給。――こ君の御ためにいかうし給。（一二一頁10行）

③左衛門督――左衛門尉（一二六頁13行）

④かのよのためともなれ。――かのよの道ともなれ。（一四一頁11行）

①は柏亭本が誤りであると思われる例であり、②は前田家本が誤りであると思われる例である。③は、表記の違いが身分の差となってあらわれたものであるが、どちらが妥当であるかについては、にわかには判断出来ない。④は、「為」と「道」との類似によって生じた相違であり、これも優劣は付け難い。⑤は、『本文編』では「なめく」と校訂されている。校訂した場合、「礼儀知らずで使いにくい」（小学館新編全集現代語訳）となるが、柏亭本の場合、「すべてにおいて使いにくい」となり、そのままで文意が通じる。

最後に『本文編』における校訂箇所についてふれておく。『本文編』では前田家本でおそらく誤りであろうと思われる箇所が校訂されてある。そこで、該当箇所が柏亭本においてどのような状況であるのかを調査した。その結果、藤原の君巻では、校訂前の表記と一致する箇所が九割近くにのぼり、忠こそ巻でも七割近くみられた。このことから、藤原の君巻・忠こそ巻は、俊蔭巻よりも、前田家本

と柏亭本とが近い位置にあることがいえる。ただ、前田家本が柏亭本によって校訂できる箇所が、藤原の君巻では一割程度、忠こそ巻では三割程度存していることも指摘できるのである。

## 二　前田家本における異本注記について

現在のところ最善本とされている前田家本には、異本注記が施されている。柏亭本の場合、俊蔭巻には異本注記がみられなかった。しかし今回の調査によると、藤原の君巻・忠こそ巻には異本注記がみられ、その箇所および注記内容は、特に藤原の君巻においてかなりの割合で重なる部分があることがわかった。『本文編』欄外に示されている全三十一例のうち、柏亭本が同じ注記をしているのは次の二十一例である。漢字や仮名の相違などは考慮しないため、柏亭本の記述のみを挙げることとする（括弧内の頁・行数は『本文編』のものを示す）。また、前田家本にみられる「＊」注記については、柏亭本にみられないため対象としない。

・民部卿（六九頁15行）
・民部卿（七一頁8行）
・ころ・すみ（七三頁4行）
・思ふこと（七三頁10行）
・君の御てに社あめれ（七四頁18行）
・のちおひ（七六頁2行）
・さふらはて（七六頁15行）
・とのたうひゝろけよ（八四頁10行）
・またくなして（八七頁17行）
・七条の大路（八九頁15行）
・風に吹たつる（九六頁8行）
・さい相さきのそつ（九八頁16行）＊二例と数える。
・なから（九九頁15行）
・三百石のよね（一〇〇頁17行）
・たくひなく（一〇四頁11行）
・あこ君にかく（一〇六頁17行）
・もすくをなんたけ（一〇七頁17行）
・てかきをして（一〇八頁16行）
・ひとくなん（一〇九頁13行）
・すもりの（一一〇頁2行）

また、前田家本に異本注記がある箇所で柏亭本に異本注記がないのは次の七箇所である。上段に柏亭本の表記を、下段に前田家本の表記を示す。

①前田家本の本文部分と同じ場合（全二例）
・入立給へり――いりたち給へり（六七頁3行）
・つきなき身――つきなき身（九一頁17行）
②前田家本の注記部分と同じ場合（全四例）
・今さら――いまさへ（七二頁13行）
・あそひ人――あそひこと（七三頁11行）

・右大将殿――左大将殿（一〇五頁17行）
・玉の――たもの（一一二頁11行）
③どちらとも異なる場合（全一例）
・たゝまさの太郎――たゝまさの大し（六九頁16行）
最後に、前田家本と柏亭本の異本注記が異なる三例を挙げる。
・くし給へるさらに――くし給へる・さらに（七〇頁4行）
・此比殿参りこん――このころ・まいりこむ（七六頁7行）
・なめきめ侍りつる――なめきみ侍りつる（八六頁13行）
以上のように、柏亭本の異本注記は前田家本とかなり似通っており、このことからも、藤原の君巻については、両本が近い位置に存していたことがわかる。ただし、完全に一致しているわけではないので、さらなる検討が必要であるといえる。
同様に忠こそ巻についても記す。忠こそ巻では異本注記は全十例であり、次の四例が柏亭本において同じ注記となっている。
・橘千かけ（一一七頁2行）
・つかれ伏侍れは（一三三頁10行）
・真砂をすゝく（一三九頁10行）
・木草の色もかはらすは（一四〇頁6行）
前田家本に異本注記がある箇所で、柏亭本に異本注記がないのは次の五例である。
①前田家本の本文部分と同じ場合（全一例）
・かすもかへなん――かすもかへなん（一二四頁7行）
②前田家本の注記部分と同じ場合（全四例）
・みならして――こならして（一二二頁2行）
・とくまかりかくれなん――とくまかりかくれなん（一三一頁10行）
・ころしにやらん――ころしにやいま（一三一頁14行）
・こゝに――ころに（一三七頁1行）
前田家本と柏亭本の異本注記が異なる例は次の一例である。
・源たゝつね――源たゝつね（一一七頁1行）
忠こそ巻は藤原の君巻と比較すると、柏亭本における異本注記が少ないことが目につく。今後の巻においても注意し、比較検討していきたい。

## 三　「ほに」について

前稿において、俊蔭巻では「ほに」という語句が前田家本に四例みられたにもかかわらず、柏亭本にはみられなかったことを指摘した。「ほに」は、『うつほ物語』において未だ解決されていない語句であり、今回、藤原の君巻・忠こそ巻についても、この「ほに」という語句を追調査する。
藤原の君巻では、「ほに」という語句が「ほどに」とともに用いられており、以下のように分類出来る。
①柏亭本「ほとに／程に」――前田家本「ほとに」　一八例
②柏亭本「ほに」　――前田家本「ほに」　九例

③柏亭本「ほに」　――前田家本「ほとに」　一例

その他、『本文編』において「ほに」と校訂されている箇所が、前田家本・柏亭本ともに別語を用いている場合が二例みられた（「ほい」八一頁6行・「おり」九二頁17行）。以上によると、両本の異同がみられるのは③のみであり、藤原の君巻では「ほに」と「ほどに」が混在しており、その混在状況は両本において酷似していることがわかる。

なお、忠こそ巻においては「ほに」という語句は柏亭本・前田家本ともに用いられておらず、「程に(ほとに)」が十七例みられるという結果となった。今後の巻においても注意していきたい。

## おわりに

以上、前稿と併せて首巻三巻の調査報告を終える。藤原の君巻・忠こそ巻においては、柏亭本と前田家本との位置関係はかなり近いものであるといえる。これは、俊蔭巻が、前田家本よりもむしろ浜田本系統に近いものであるということと特色を異にしている。この相違はどこからくるものなのだろうか。中村忠行氏[10]は、無窮会本に至って浜田本系統の混入がみられるとしておられ、その指摘を受けて吉山裕樹氏[11]が柏亭本と無窮会本との近接関係を推測しておられる。今後、前田家本だけではなく、諸本を幅広くみていくことによって、柏亭本の位置付けをはかっていきたいと考える。

〔注〕

(1) 拙稿「柏亭本『うつほ物語』（広島大学蔵）の特色（その一）――俊蔭巻本文の前田家本との比較を中心に――」（「古代中世国文学」第十一号　平10・4）。

(2) 第二冊の前見返し袋綴外側には「第二　藤原の君」と書かれ、内側には忠こそ巻冒頭部分（「～やしなひ給程に」）が八行書で書写されている。同後見返し袋綴内側には忠こそ巻冒頭付近（「らきたなき人につけて～御とのに参りて門にたてり」）が十三行書で書写されている。第三冊の前見返し袋綴外側には「第三　たゝこそ」と書かれ、内側には第二冊前見返し袋綴内側の続き（「殿の人見付て～おとゝまれに物し」）が十三行書で書写されている。同後見返しの袋綴内側には「給へははしふれ～しやうのことひはなと取出」と三行分書写されている。

(3) 「前田家本『うつほ物語』はどのような本か」（「物語研究会会報」第二十八号　平9・8）における、室城秀之氏の分類（一行におさめる〈一行型〉、一行で書き切れない場合に次の行の行頭へ続けて二行にまたがらせて書き、続く本文は次の行の行頭から書く〈二行断絶型〉、二行にまたがらせて書き、和歌に続く本文を二行目の和歌の後に続けて書く〈二行連続型〉の三通り）の分類に従う。

(4) 前田家本本文の引用は、尊経閣文庫蔵前田家十三行本を底本とする『うつほ物語の総合研究1　本文編上』（室城秀之・西

端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志甫由紀恵・中村一夫編　平11勉誠出版）に拠る。以下、本稿において『本文編』という時には本書を指す。

(5)『日本古典文学大系　宇津保物語一』（河野多麻校注　昭34岩波書店）の注記によると、「なくねにくらきしのゝめ」（榊原本其二／風葉和歌集／紀氏本イ）、「たひねのをしきしのゝめ」（九大本［文化版本書入本］／友人某所蔵古写本其一／荷田在満校本［羽倉本］イ）、「なけともあけぬしのゝめ」（玉琴）、「なくなるしのゝめのそら」（本居氏本）、「しのゝめ」（大橋長憙本／新宮城書蔵本／榊原本其一／猪苗代兼寿本／内閣文庫本）、「ナシ」（延宝五年板本／狩谷※斎本／紀氏本／岡本文庫本／萩野本／新宮城書蔵本イ）と諸本に異同がみられる。

(6) 中村忠行氏が、「宇津保物語に関する展観書目録（附解説）」（日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅱ』（昭49　有精堂）所収）において『うつほ物語』諸本の関係を図示しておられる。まだ検討の余地は残されていると思われるが、一つの目安として大いに参考にすべきであると考える。

(7) 前掲(6)の論文および『校本うつほ物語』解題（笹淵友一氏、昭15　興文社）、古典文庫本解説（同氏、昭32）などを参照。

(8) 吉山裕樹氏「広島大学蔵「うつほ物語」（柏亭本）について」（「古代中世国文学」第二号　昭54・9）。

(9)『うつほ物語全』（室城秀之校注、平7　おうふう）、新編日本古典文学全集『うつほ物語①』（中野幸一校注・訳、平11小学館）の頭注では、この部分について、副詞「え」の重複が千蔭の動揺を表すものかとする。

(10) 前掲(6)の論文。

(11) 吉山氏は、前掲(8)の論文において、柏亭本俊蔭巻の本文は浜田本系統に属し、藤原の君巻以降では前田家本の本文に近くなっていることを指摘しておられる。

――いかわ・ゆうこ、広島大学大学院博士課程後期在学――